

第7回府中市文化芸術推進計画検討協議会会議録

1 日 時 令和7年9月17日（水）午後3時15分～午後5時

2 場 所 府中駅北第2庁舎3階 会議室

3 出席者（敬称略）

(1) 委員9名

小林真理委員（会長）、小野一之委員、小林瑞恵委員、新井有佐委員、
玉村明日香委員、中村洋子委員、橋本善八委員、鹿島伸明委員、澤井すみ子委員

※ 大平洋介委員（副会長）欠席

(2) 職員8名

矢ヶ崎文化スポーツ部長、平澤文化生涯学習課長、斎藤文化生涯学習課長補佐、
佐々木文化生涯学習課文化振興係長、中司主任、鵜久森事務職員、
江口ふるさと文化財課長、鎌田美術館副館長

4 報告事項

(1) 配布資料の確認

ア 会議次第

イ 資料1 第6回文化芸術推進計画検討協議会会議録（案）

ウ 資料2 次期文化芸術推進計画素案に対する意見対応シート

エ 資料3 次期府中市文化芸術推進計画素案

オ 資料4 評価の考え方（ロジックモデル）

(2) 前回会議録の確認

各委員に校正を依頼した前回会議録（案）について、市民に公開することが了承された。

(3) 資料説明（事務局より）

第6回協議会の意見を資料2に整理

資料3「素案」の説明

資料4「評価の考え方（ロジックモデル）」の説明

5 審議事項

素案の検討

会長： 今回の論点は2つだ。1つ目の計画の推進体制については、前回も扱ったが事務局から新しい提案があった。2つ目は、資料4の評価指標の考え方である。まず、5章の推進体制に対する意見を伺いたい。

委員： 「計画の推進に向けて」という視点では分かりやすくなっている。28ページ推進体制の5行目に、「美術館・博物館・音楽ホール・劇場」のように文化芸術に関する施設を入れた方が見る側は分かりやすい。多様という意味でも、ここに入れたい。

同ページ6行目の「文化芸術に関わる多様な・・・」の「多様」は、

「多種多様」の方が適しているのではないか。文化芸術は多種多様なメンバーを対象にしているので、期待感や変わることが伝わると良い。ジャンルを超えた連携の促進、文化芸術活動の情報共有など、これまでと少し違うというような一文を入れてはどうか。

「府中市文化芸術推進ネットワーク会議（仮称）」という名前でも十分伝わるが、「府中文化推進チーム」や「プロジェクト府中」など、名称に遊び心があっても良い。新しい人がメンバーに入ってくるならば、覚えやすく活動的な名称が良い。

ネットワーク会議のイメージ図には、国際交流関係、観光振興関係の団体などもあった方が良い。施設を利用している側の立場と運営側の立場では見方が異なると思われるため、施設を運営している側にも参加してもらった方が良い。

委員： 28ページの内容は、府中文化振興財団と府中市が一緒の括りになり、改善された。ネットワーク会議イメージ図の矢印の大きさ・色の違いが意味するところや、矢印の中身を記載すると、分かりやすいのではないか。

29ページでは、主体や役割が分かれており、市と府中文化振興財団の関係性があまり伝わってこない。本文には「地域振興や教育、福祉、環境など多様な部門が連携しながら」との記載があるが、それぞれの組織や管轄の説明があると分かりやすい。市内企業は具体的な名前を入れるのか。図の中に各主体の中身についての説明があってもいいのではないか。

会長： 重要な指摘だ。白い矢印とオレンジの矢印との違いについて事務局に説明してほしい。

事務局： どちらの矢印も、交流・連携する意味という意味である。府中文化振興財団と市は、既に一定以上の強いつながりがある。市の外郭団体であり、市の文化芸術の推進に寄与する事業を実施していただいているため、他の主体とは違う位置付けとして記載した。

会長： 今までやってきた連携を明確に示したいということであれば、他と同じオレンジの矢印でも良いのではないか。それよりももっと強いパートナーシップ的役割を担ってほしいという意味であれば、そのような文言を入れることも検討していただきたい。

委員： 国際交流や観光の視点はどこかに入れた方が良い。府中市と府中文化振興財団の関係は、市の文化施策を受けて府中文化振興財団が動いているので、一体であるという意味で「+」なのではないか。全体の活動をここが支えている立場だと思う。支える公のイメージがあった方が良い。施設名はこれまでも出てくるが、5章の中心になるため、改めて文章に入れる方が良い。他の主体はやることをイメージできるが、市内企業については外出しの注釈で簡単な説明があっても良い。

計画の中に入れる話ではないと思うが、「府中市文化芸術推進ネットワーク会議（仮称）」をどのように具体的にやっていくのか、スタートのところで計画をどのように浸透させていくかを考えた方が良い。計画のお披露目を令和8、9年度にどのようにするのも市で考えてほしい。

今までの意見は反映されていると思うのでこのまとめ方で良い。

会長： 市民に理解・参加してもらうことは重要だ。企業には、どのように関わってもらうのか。寄附してほしいということか。

事務局： お金の協賛もあるが、市内に事業所がある企業と関連する文化財団と府中文化振興財団がつながり、連携したイベントの企画などのきっかけづくりにしたいというイメージだ。

会長： 市内には様々な企業があり、地域のお祭りを支援する事業者もあるため、そういう事業者からの寄附などが文化芸術活動に重要な役割を果たしている。メセナ的な形ではなく、新たな形で関わっていただきたいという考えが、「貢献することが期待される」という文章になっていると捉えた。

委員： その考え方でいくと、市内企業を広い概念で捉えても良いのではないか。例えば、大國魂神社は企業ではないが、府中市にとって重要であり、歴史的な活動につながっている。他にも、寺社仏閣・庭園など文化財的なものとの関係性が計画の中に含まれているので、もう少し幅広く捉えられると良い。市内企業と表現すると、どうしてもメセナ的な感じが出てしまう。

会長： ここは検討が必要だ。

委員： 28ページの図だが、府中市が左の方が良いのではないか。府中市があって府中文化振興財団があると思う。また、この2つの組織間の連携・協力は当然であるため、矢印はなくても良いのではないか。オレンジの矢印は、中央の市民・芸術家・文化芸術団体等と周りの全ての主体がつながることが分かるように、同じ大きさの矢印で示すと良い。

会長： 重要な指摘だ。表現については工夫の余地があると理解した。

委員： 28ページのネットワーク会議については、個々の連携が相互に影響することが分かるように双方向の矢印の方が良いという前回の提案が反映されている。矢印の大きさは色々な捉え方をされるため、工夫するとより伝わりやすくなる。多様性や共生社会につながることが一つの目標であったと思うので、観光協会や社会福祉協議会などもう少し具体的に記載することで広がりを持たせても良いのではないか。今の進捗管理のイメージなどを見ていると、閉じた会議に見えてしまう。今後、色々な人達を巻き込むことをイメージできる文章や図があると良い。

会長： デザインは難しい。閉じたいわけではないことをどう表現するか。連携の要素は出てきたので、次は、どのように私達の意図に合った文章やデザインにするかだ。どのようにして国際交流、観光、社会福祉協議会等とのつながりを作るのか検討していく必要があるのかもしれない。

委員： 指定管理制度を導入している施設と直営の施設の違いが図の中で表現されているかという点、ずれがある。他にも、市とのつながりの強いまちづくり府中などは、本質的なところと市民が持っているイメージとの間に齟齬があるのではないか。この図では色々な立場の団体が入り混じっていると感じた。文化芸術推進の底支えとして府中市があり、そこに色々な人や団体がつながっていくのであれば、ネットワーク会議は情報

交換や新しい出会いの場として面白いものになると思う。府中市と関係団体が中心になって底支えすることが分かるように整理してほしい。

市内企業というのはもっと小さな事業者のイメージがあったが、大企業に期待しているということであれば、イメージが変わってしまう。中小企業・事業者でも、社会貢献、サステイナブルな活動をし、地域や市民とつながりを持ちたがっている企業はある。助成金を出しているような大きな財団もあるとは思いますが、どうすればつながれるのか分からず困っている地域に根付いた事業者がネットワーク会議に入れば、相互に良い関係性を築けるのではないかな。

29ページの府中市の「多様な部門の連携」については、市民協働や国際交流、観光なども追加できないか考えてもらいたい。もっと色々あるだろうと思った。

30ページの進捗管理は、年2回程度の情報共有でチェックや次のアクションが出せるのか。試みは面白いが、この会議の中で市の施策に対して成果や課題を見つけるのは難しいのではないかと感じた。

まちづくり府中を始め、色々な団体が協力して企画などのアイデアを出していくと、市民に対して新しい文化の提供、古い文化を継承する取組になるのではないかな。

会長： 構成要素をどのようにイメージしてもらうかは意識する必要がある。他にも、日常的に企業から応援してもらうためには何が必要か、ネットワーク会議で進捗管理をどこまで担ってもらうのか、どのような場にするのかなどを確認しておく必要がある。

事務局は、府中文化振興財団はコアであると言っているが、全部同じ力関係でも良いのではないかな。これまで連携してきた団体をコアにしつつ、皆と対等に連携することが今回の目的だとすれば、あまり財団に重点が置かれるのは良くないのではないかな。

委員： 28ページの図は、会議の参加者を表しているのか、それとも推進体制の相関図なのか。会議の参加者であれば、なぜ矢印があるのか。

会議の名称について、チームがいいのではないかなという意見があったが、コミュニティなどの柔らかい言葉でも良いのではないかな。会議だと固い印象を持った。

会長： 事務局の考えを確認したい。この図は推進体制のイメージ図なのか。また、進捗管理はネットワーク会議ですということだったが、進捗管理を行う会議と文化芸術を推進するため会議は同じものなのか。

事務局： ネットワーク会議を活用して文化芸術を推進していきたいと考えているが、指摘のとおり今の記載だと、推進体制と会議体の説明が混同してしまっている。

会長： 名称をどうするかは別としても、ネットワーク会議は、広く色々な団体に参画してもらい、お互いに連携し、影響し合いながら、文化や芸術を使って府中市を豊かにする取組を一緒にやってくれる人達のイメージだ。そこに関わってもらう人達は様々な分野があり、重み付けが難しい。

委員： イメージ図については、前回出た指摘を受けて進んでおり、評価して

いる。ただ、今の図の府中文化振興財団は、期間限定で指定管理を受けているだけの団体だという見方をされかねない。未来永劫、指定管理者を府中文化振興財団に任せるように見えるため、管理委託制度の中の旧式の状態にも見えてしまう。これから新しい指定管理者の選定する施設があるかもしれないが、その際にこの計画を持ち出して、市はこのような考えで財団を選定するのかと意義を唱える人が出てくるかもしれない、異議があった時のことを考えておきたい。同じく指定管理者であるNPO法人エンツリーや五藤光学研究所も外れている。それらも不公平という問題になる可能性もあることを指摘したい。

会長： 他の自治体では、非公募であった指定管理が公募になることもある。外郭団体が指定管理者として優れているのか、ある分野については優れているが指定管理者としては向いていないのか、そのような評価が行われていない場合もある。外郭団体を市の文化芸術を推進していく上で重要な団体と認め、パートナーとして一体的にやっていくような自治体もあるが、むしろ少数だ。府中文化振興財団はどうかという話は、今までこの委員会で話していなかった。ここの表現は微妙で難しい。まちづくり府中や市民活動センタープラッツなど、これから関わってもらいたい団体と同じ比重とする時に、どのような表現が良いのか。府中市の考え方もあるが、広がりを持ってやっていこうとしているのは間違いないので、どのように表現すべきか。

国際交流、観光、社会福祉協議会の話があったが、庁内の色々な課との連携も成功の肝になる。そこを図でどのように表現するか。29ページには文章で書かれているが、図の中にあっても良いのではないかな。

また、この図が推進のためのプロジェクトを表しているのであれば、国や都、他自治体といった外との連携をどう書くか。ネットワーク会議を構成するメンバーを表した図であればなくても良い。

委員： 28ページの図は、例えば市民活動団体等を府中文化振興財団は直接矢印でつながっていないため、直接の連携ができないように見える。府中市を中心にして、文化芸術を橋渡しする絵でも良いのではないかな。府中市と市民・芸術家・文化芸術団体等を入れ替えた方がじっくりくるのではないかな。4ページの計画の位置付けの図との関連を考えつつ、入替えが成り立つか検討してほしい。

会長： 府中市を中心を書くとは行政が中心で動いているように見えるが、それで良いのかという考えもある。文化芸術を推進していくことが目標なので市民・芸術家・文化芸術団体等を中心に置いているのではないかな。一方で、行政が役割を果たさなければならないという考えもある。今までやってきた下支えや環境整備だけではなく、つなぐという役割を果たしてほしいということを明確にするのであれば文章でも書いた方が良いでしょう。

ネットワーク会議は、行政に言いたいことだけ言って動かない人たちが集まっても困る。みんなが動いてくれるという前提の中で、行政の役割を明確に書けると良い。色々な人達が集まって来てくれて、ワイワイ話すイメージだと思うが、今の図ではそのように見えないので、説明や

絵の描き方を検討してほしい。この点について何か案があれば発言いただきたい。

評価指標の考え方についても意見を伺いたい。

委員： アンケートの聞き方で結果が変わってくるのではないかな。指標を定め、基準値や目標をガチガチに決めるのは難しいのではないかな。

会長： 最近はこのような指標があるのが当たり前のようになってしまっているところがある。

委員： 現行計画でやっている施策がどうなっているのかというつながりが見えない。目的・目標がここにないが、それで良いのか。総合計画の基本施策に基づいた考えが見えない。アウトカムも目的・目標・数字がない。計画が策定されても指標がしっかりしていないと絵に描いた餅になる。目標・目的をはっきりさせた方が良いのではないかな。

令和7年度から第7次総合計画の後期が始まるが。その内容を網羅しているのかが見えない。目標を立てると、それがマニフェストになり、PDCAにつながる。

会長： 前提として、市の総合計画に沿って動いている。資料4は、今作っている計画の目標や成果を整理した物である。

委員： 資料4に書かれたアクションを実行することがこの計画の目的であるという意味なのではないかな。そして、アクションに対するアウトカムが初期と中長期に分かれて書かれていると理解した。

アンケートを取ってどれだけの意味があるのか。評価は「府中市文化芸術推進ネットワーク会議（仮称）」が考えれば良いのではないかな。コアで一生懸命やる人たちが集まると、色々な人が巻き込まれていく。ただ、閉鎖的になってくると、中心になる人達が決まってしまう入りにくくなるため、そのコントロールが難しい。定期的に皆の意見を聞くことが成果であり、その意見を成果物としてまとめる方が有効ではないかな。29ページに府中文化振興財団にアーツカウンシル機能を担わせるという表現がある。その機能を活用すれば、市民や団体の生きた声を反映した評価指標が生まれるのではないかな。とても難しいが、数字での目標値よりも、今困っていることや改善されて良かったという声を吸い上げることが今後の目的になるのではないかな。

会長： 毎年行っている市民意識調査などを使って数字を把握しておくのも手だと思う。それで増減を捉えていけば良い。参加型の評価に関わる人達にどのような成果があるか分かる方が良い。

今の意見はとても重要で、参加型の評価に関わってもらった人達に成果を聞いてまとめていく方が次につながるということはあるので、何かしら仕込んでいくことも一つの手ではないかな。

委員： アンケートは、どういう回答を望んでいるのかで書き方が変わってくる。例えば「1年間のうち文化芸術活動を行った人の割合」は、文化芸術活動をもっと広く捉えてもらえるようになれば、割合が増えるのではないかな。インパクトの欄のところの「幸福度を感じる」という表現は、「幸福感を感じる」の方が良い。

委員： 中長期のアウトカムは唐突な感じがした。

ネットワーク会議で意見を聞くのであれば、ここで枠を作らず流動的にしておいた方が、次のアクションにつながるのではないか。

委員： 文化の評価は難しい。一概に数値で評価することは文化には合わない。評価についてはネットワーク会議が中心になると思うが、関わっていない段階で評価ができるのか。ロジックモデルができて同じではないかと想像してしまった。それぞれがやっていることに対して、どのような成果や課題があり、今後どのようなアクションをするのかといった、これまでの軽観測の蓄積を共有するネットワークができることはとても面白いが、評価することになったときにその面白さが失われる。どこに向かっているのか分からなくなった。

委員： 資料４の「はぐくむ」のアウトカム指標が気になった。「文化芸術関係のクラブ活動、習い事等をしている１８歳未満の子どもがいる市民の割合」については、アンケート内容が局所的過ぎてもったいない。ここは、ミクロ・マクロのレベルでどんな活動が増えたのか、子ども達がどのように親しめたのか、多角的なアプローチがどれだけあるのか、といったような、この計画によってアプローチがどのように広がったのかを捉えた方がアウトカムに紐付いた指標になるのではないか。そこをすることで、自分が関わる時にも発見があり、次につながるのではないか。

委員： 基本施策４の「つむぐ」について、アクションで「文化財の保存、整理、活用、美しい自然、歴史的景観の保全・整備」「文化芸術によるにぎわいの拡充」とあるが、既に具体的なターゲットが明確になっているので、もっと具体的に明記することも可能である。そうすると目的や達成度も明確になるのではないか。けやき並木の保存を踏まえた活用がこの計画の中でも重要なポイントになるし、内藤家住宅は中心の賑わいを西にも広げる意味がある。成功例として、熊野神社古墳の市民協働による活用がある。

会長： 評価はすごく難しい。行政が公金を使って文化芸術推進施策をやっていくための根拠が必要であり、毎年度予算を付けて実施する時に、成果が見えた方が次の説明がしやすい。割り切って考えることもあり得る。

アプローチの広がりをつまえるという考えがしっくりきた。行政が、どう関わり、どうアプローチし、どのように波及して効果につながったのかということが見える方が納得感を得られ、成果があればもっとやった方が良いという話になるのではないか。数値でしか表現できない行政の問題もある。文化芸術施策の重要性の説明をどれだけ行政が引き受けてやっていくつもりなのか。

ただ、指標がないことで何もやっていないように見えるのも困る。目標値と一緒に考えると堅苦しくなる。例えば、今年度の入場者数が減った場合に、なぜ減ったのかを考えるきっかけになれば良い。

委員： 置きっぱなしのアンケートを廃止し、対面でのアンケートの満足度を評価にしている美術館もある。アーツカウンシル的な機能を働かせ、参加者の意見を長く吸い上げる仕組みを府中市でも考えればよいのではないか。

会長： 自分達の業務をより良くするためにやっているのだろう。府中市もそのような感じでできないか。意見の吸い上げについて、エネルギーをかけてやるべきなのは、やはり行政ではないか。ステークホルダーとして一緒にやっている人にまで評価をさせるのは違うと感じる。行政でやっていることを明確にし、それと紐づく数字を指標にできると良い。

委員： 同じ意見だ。行政を評価するというのは違う気がする。

計画の中で府中市が新しい試みをやっているということが、評価につながっていくのではないか。対面で意見を聞いてみるなど、どのような手段で課題を解決していくのかという点が重要なのではないか。

会長： ネットワーク会議が行政のやっている事業を評価するということだが、社会が変わるきっかけを作るのは行政の計画であり、それを評価する時にこの指標で良いかと考えると違和感がある。進捗がはっきり分かる事業はそれでも良いのかもしれないが、新しい試みについては新しい評価方法を取り入れてみても良いのではないか。

事務局： 文化芸術分野の評価指標の設定には課題を感じている。8年間経った時に振り返るためには、数字があった方が根拠として示せると考え、今回の指標を提案した。提案した指標を把握することは、総合計画の市民意識調査で把握が可能であり、市で自己評価できる。

ネットワーク会議での評価は、点数を決めて欲しいわけではない。事業と一緒に実施した人の生の声や、外から見た人の生の声を拾う場としてネットワーク会議を活用したい。指標とネットワーク会議の2本柱で評価を進めたい。

会長： ネットワーク会議は新しい試みであり、事業としてこの会議をやることが肝なので、23ページに事業として記載する。それを追加で書き加えると良いのではないか。

委員： やるのであれば、ゲスト講師など目玉を作ることが大切だ。芸術文化の概念を広げることも会議の役割になる。例えば、食文化や建築文化などの一般的には文化と意識されない分野のゲストスピーカーを呼んで話をしていただき、そこでインスパイアされてマッチングするなど、仕組づくりがなければ長続きしないのではないか。

会長： 他の事例を学ぶことで、成功するネットワーク会議を府中ではできるのではないか。コアの人が集まったときの開き方が課題かもしれない。

皆さんは財団を信頼されているが、ある自治体では、財団がやっていることは今の時代に合わないため、文化行政のコアにするのはおかしいのではないか、という意見が出た。財団の重要性と一緒に理解してもらい、財団にも自分達のやり方を見直すきっかけになるような会議になれば、上手く設えることは難しいが、楽しいものになるかもしれない。

委員： 成功例を作ってもらえれば良い。それぞれの団体には、仲介する人やプロデュースする人は多数いる。

会長： コーディネートし、仲介する人は重要だが、その人が一人だけで活動しても駄目であり、市もそれに気付いているのでネットワーク会議を作ろうとしていると思うので、一緒に考えていきたい。

委員： ネットワークの中に子ども達がいらない。小中学校の先生方も入ってほしい。

会長： 教育委員会との連携は難しい。

委員： 入っている自治体もある。小中学校が入ってくると自由度が広がる。府中市のマスコットキャラクターも、きちんと周知していくことが大切だ。

6 その他

次回の府中市文化芸術推進計画検討協議会の日程を報告し、了承を得た。